

である。今回、発症早期の腓床ドレナージ術および、持続性血液浄化療法が有効であった小児重症急性肺炎の1例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告した。症例は9歳男児、心窩部痛および呼吸困難を主訴に当科紹介受診。血清および尿中アミラーゼの著明な上昇と、腹膜炎症状、腹部CT所見より重症急性肺炎の診断のもと緊急下に腓床ドレナージ術、術後持続性血液浄化療法および酵素阻害剤投与を施行した。術後経過は良好で、MOF・感染性壊死性肺炎は認められなかった。重症急性肺炎の治療における外科的アプローチは、その施行時期について未だ一致した見解が得られず検討を要する。本症例では発症早期の腓床ドレナージ術が、MOFおよび感染性壊死性肺炎の予防に対し有効であったと考えられた。

7) 顎顔面外傷の臨床的検討

渡辺 陽・小林英三郎 (日本歯科大学)
高田 正典・金子 恭士 (新潟歯学部)
又賀 泉 (第二口腔外科)

当科では第33回本学会にて顎顔面骨骨折について発表したが、軟組織損傷や歯の損傷についての検索がなかった。今回軟組織損傷や歯の損傷を含めた、顎顔面領域の外傷全般について、retrospective に検討をしたので、その概要を報告した。

1. 1974年から1996年までの23年間に当科を受診した顎顔面外傷症例981例について検討した。
2. 年齢・性別分布では、20歳以下の症例で全体の50.0%を占め、性差は2.3:1と男性が多かった。
3. 受傷原因では、転倒・転落が499例、50.9%を占めた。
4. 来院経路では、紹介症例が638例、65.0%を占めた。
5. 外傷の種類については、軟組織、歯、骨、それぞれ単独の損傷よりも、これらを合併する症例が多かった。
6. 部位については、軟組織損傷でオトガイ部、口唇が合わせて48.9%を占め、歯の損傷では、上下合わせて前歯部が90.6%を占めた。下顔面正中部の受傷が多と考えられた。
7. 全981例のうち、特に処置を必要としなかった症例は34例のみであった。

8) 外傷性心臓大血管損傷に対する手術

山崎 芳彦・金沢 宏 (新潟市民病院)
中沢 聡・榛沢 和彦 (心臓血管外科)
齋藤 憲・高橋 善樹
上野 光夫 (新潟大学第二外科)

心臓大血管損傷は致命的となることが多いが、中には早期診断早期治療により救命できる例もかなりあるものと思われる。我々は、大動脈損傷3例、大動脈弁閉鎖不全(AR)2例に対し手術を行い、何れも経過良好であった。年齢は18~57才(男2,女3)、バイク事故1例、乗用車事故3例(何れもシートベルトなし)雪崩事故1例であった。大動脈損傷の診断は、短期の胸部X線の変化とCT所見による血腫の範囲、大動脈径の異常などが有用である。ARは、経過観察中に血行動態が悪化し、心エコーなどで発見されることが多い。何れも急速に状態が悪化することが考えられ、早期の手術療法が必要である。

9) 当科における腹部救急手術

—特に合併症に関して—

本間 英之・下田 聡
竹久保 賢・田中 典生 (県立新発田病院)
武田 信夫・小山 真 (外科)

平成5年1月より平成8年12月までの間に緊急手術の対象となった130例のうち腸管の損傷を伴った33例を対象に、その損傷部位別(結腸・直腸損傷群及び小腸損傷群)に、背景因子及び合併症、予後を検討した。合併症(創離解、縫合不全、肺炎呼吸不全など)はいずれも結腸直腸損傷群に高い発症率の傾向を認めた。また、全入院期間でも結腸直腸損傷群が、長期間である傾向を認めた。しかし抗生剤の投与日数は、両群とも差を認めず、入院期間の延長は、局所の感染因子によるものではないかと思われた。また、単純に抗生剤投与は重篤度の指標にはなり得ないとも思われた。死亡症例は4例のみであり、①高齢者 ②悪性疾患 ③ショック状態での手術という傾向が認められた。